

## 第2 【事業の状況】

### 1 【業績等の概要】

#### (1) 業績

当連結会計年度（平成15年10月1日～平成16年9月30日）におけるわが国経済は、設備投資や輸出が増加し、企業収益の改善が進み、雇用情勢の改善により個人消費が緩やかに増加する等、景気が着実に回復してまいりました。

情報通信業界におきましても、設備投資や個人消費の増加等の影響もあり、パソコン出荷台数が前連結会計年度（平成14年10月1日～平成15年9月30日）を上回り、また、企業のソフトウェア投資が緩やかながらも増加している等、今後のソフトウェア・情報サービス需要には期待の持てる状況になってきております。また、ブロードバンド環境の普及等、ユビキタス・ネットワーク化が着実に進展しております。特に携帯電話につきましては、平成16年9月末にはインターネット接続の契約数が72百万件を超える等、インターネット端末として広く浸透しております。

当社グループにおきましても、携帯電話で3キャリア（NTTドコモ、KDDI、ボーダフォン）向けに提供いたしております無料版「乗換案内」の検索回数は平成16年7月には月間57百万回を超える等、インターネットでの更なる事業展開の基盤を確立してまいりました。

このような環境の中で、当連結会計年度における当社グループの売上高は1,448,571千円（前年同期比25.2%増）、営業利益は300,479千円（前年同期比63.2%増）、経常利益は300,598千円（前年同期比86.2%増）、当期純利益は148,805千円（前年同期比75.5%増）という経営成績となりました。なお、会計処理の変更により、当連結会計年度から、「乗換案内時刻表対応版」の店頭販売パッケージにつき、返品調整引当金を計上する方法に変更した結果、従来の方法によった場合に比べ、営業利益及び経常利益がそれぞれ4,839千円増加し、税金等調整前当期純利益が16,685千円減少しております。

事業の種類別セグメントの業績は、次のとおりであります。

#### （乗換案内事業）

乗換案内事業は全体として、売上高・営業利益ともに順調な推移となりました。

携帯電話向けの事業につきましては、携帯電話向けの有料版である「乗換案内NEXT」は順調に会員数が増加しており、当連結会計年度の初め（平成15年10月）には3キャリア合計で約8万人でありましたが、平成16年9月末には22万人を超えております。その結果、売上も順調に推移しております。一方広告売上は、当連結会計年度の終盤にかけて前年同月を上回る等改善の傾向が見られたものの、全体としては前年同期を下回っております。

「乗換案内」のパソコン向け製品である「乗換案内時刻表対応版」につきましては、前年同期と比べ売上が減少いたしております。これについては主に、プレインストール版の出荷本数の減少が直接・間接に影響を与えたものであります。

イントラネット版「乗換案内」等の法人向け製品の売上につきましては、全体としてやや低調な推移となりました。

旅行関連事業に関しては、パソコン向けインターネット版「乗換案内」および携帯電話向け「乗換案内NEXT」の利用者等に対して、旅行商品の販売を実施しており、売上は増加しております。

以上の結果、売上高1,319,843千円（前年同期比44.5%増）、営業利益458,659千円（前年同期比23.0%増）となりました。

#### （マルチメディア事業）

マルチメディア事業では、ゲーム業界全体の消費不振の影響を少なからず受けております。当連結会計年度におきましては、家庭用ゲームソフトの新作1タイトルを発売いたしましたが、それ以降家庭用ゲームソフトの新作の開発・販売は行わない方針としております。

携帯電話向けゲーム「hamster倶楽部」につきましては、3キャリアでサービスを提供し、売上は概ね順調に推移いたしております。また、新規コンテンツとしてNTTドコモのiモード向けに「わいわいどうぶつらんど」の提供を開始いたしました。

以上の結果、売上高86,117千円（前年同期比53.7%減）、営業損失34,837千円（前年同期は52,450千円の損失）となりました。

#### （その他）

受託ソフトウェア開発等につきましては、売上高は減少しているものの、コスト削減効果が表れてきており、売上高42,610千円（前年同期比25.5%減）、営業利益11,405千円（前年同期比14.0%増）となりました。

なお、上記の事業の種類別セグメントの営業利益は、配賦不能営業利益控除前であり、合計は連結営業利益と一致しておりません。

## (2) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における連結ベースの現金および現金同等物は、前連結会計年度末と比べ97,526千円増の891,141千円となりました。

当連結会計年度における、前連結会計年度と比較した、各キャッシュ・フローの状況とその要因は次のとおりであります。

### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは177,791千円の収入（前年同期は32,038千円の支出）となりました。前年同期と比べ大きく変動している主要因は、税金等調整前当期純利益が120,518千円増の281,196千円となったこと及び法人税等の支払額が62,002千円減の100,712千円となったことであります。

### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは56,547千円の支出（前年同期比8.6%増）となりました。有形固定資産の取得による支出及び無形固定資産の取得による支出がともに減少したものの、投資有価証券の取得による支出17,500千円があったこと等により、全体としては前年同期とほぼ同程度となりました。

### (財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは23,708千円の支出（前年同期は175,258千円の収入）となりました。前年同期と比べ大きく変動している要因は、前年同期には株式発行による収入204,280千円がありましたが、当連結会計年度には資金調達を特に実施していないことあります。

## 2 【生産、受注及び販売の状況】

### (1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績を事業の種類別セグメントごとに示すと、次のとおりであります。

事業の種類別セグメント	生産高(千円)	前年同期比(%)
乗換案内事業	1,087,720	19.1
マルチメディア事業	69,859	△60.5
その他	42,610	△25.5
合計	1,200,190	4.6

- (注) 1 金額には、消費税等は含まれておりません。  
2 金額は、販売価格によっております。  
3 セグメント間取引については、相殺消去しております。

### (2) 受注実績

当連結会計年度における受注実績を事業の種類別セグメントごとに示すと、次のとおりであります。

事業の種類別セグメント	受注高(千円)	前年同期比(%)	受注残高(千円)	前年同期比(%)
乗換案内事業	86,049	1.1	33,778	22.8
マルチメディア事業	—	—	—	—
その他	37,410	△33.4	—	—
合計	123,460	△14.3	33,778	22.8

- (注) 1 金額には、消費税等は含まれておりません。  
2 セグメント間取引については、相殺消去しております。  
3 受託開発以外の製品については見込生産を行っております。

### (3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績を事業の種類別セグメントごとに示すと、次のとおりであります。

事業の種類別セグメント	販売高(千円)	前年同期比(%)
乗換案内事業	1,319,843	44.5
マルチメディア事業	86,117	△53.7
その他	42,610	△25.5
合計	1,448,571	25.2

- (注) 1 金額には、消費税等は含まれておりません。  
2 セグメント間取引については、相殺消去しております。

### 3 【対処すべき課題】

ユビキタス・ネットワーク社会への転換期にあつて、情報通信産業におけるサービスの形態はこれまでとは次元の異なるサービスへと変化しております。この変化に対応し事業を成功させるカギは、社会システムの変化に対応する事業戦略を有していること、そこで求められる新技術やノウハウを常に先行して蓄積し続けること、及びそれらを可能にする体制であると考えております。

また、当社グループの提供する製品・サービスの利用者が増加するに伴い、また、今後の事業展開に向けて、当社グループの提供する製品・サービスの信頼性・安定性がこれまでも増して重要になってくるものと考えております。

#### (1) 優秀な人材の発掘及び育成

当社グループは、新しい技術への対応が常に要求される事業を営んでおります。最先端の技術を習得し、高度な技術力に裏付けられた、消費者に使いやすいサービスの提供を目指しております。今後は携帯電話をはじめとする各種ネットワーク端末やサーバー関連の技術力および高品質なサービスの企画・開発力が競争力の源泉となります。その確保のためには、優秀なスタッフと、それらによって構成された開発体制が必要であると認識しております。今後の当社グループの成長のため、現在当社に在籍しているスタッフと同等もしくはそれ以上の人材の発掘・育成を行ってまいります。

#### (2) 組織の柔軟性・機動性の確保

当社グループは情報通信産業に属しており、その特性上、変化への素早い対応が不可欠であります。そのため、「スモールユニットの構造体」を基本戦略とし、事業展開に応じて組織の組み替えが容易にできる、というような組織の柔軟性の確保や、意思決定の迅速化による機動性の確保を図ってまいります。

#### (3) 携帯電話向けソフトウェア技術の蓄積

当社グループでは、今後のユビキタス・ネットワーク化の進展においてキーとなる端末は携帯電話であると認識しており、従って現状において優先的に蓄積すべき技術は、携帯電話向けのソフトウェアに関する技術であると考えております。携帯電話そのものが、日々進化を続ける中、当社グループにおいても、新技術の獲得・技術の更新を継続して行ってまいります。

#### (4) 収益源の確保

当社グループの事業の拡大のため、収益源の多様化が必要になると考えております。その例といたしましては、提供するコンテンツに関連する商品の販売や、商品・サービス等の情報の提供による手数料収入等が挙げられます。必要に応じて多角的な業務提携の推進等を行い、収益源の多様化に努めてまいります。

#### (5) ネットワーク関連設備投資

携帯電話及びパソコン向けにインターネット上で提供している「乗換案内」の利用者の増加や、今後のインターネット関連の事業拡大、携帯電話の通信料定額制の普及等に伴い、データ通信量の増加が見込まれます。このような状況において、顧客満足の上昇を図るためには、安定的にサービスを提供し、また、処理速度を維持・向上させることが必要になってまいります。そのため、サーバー等のネットワーク関連設備への投資を行い、インターネットサービス環境の整備に努めてまいります。

#### (6) 内部管理体制の充実

当社グループは、平成16年9月30日現在、役員10名および従業員47名と小規模な組織であり、内部管理体制もその規模に応じた体制を整えております。当社グループは、今後の事業拡大に伴い、コーポレートサービス機能のIT化・集中管理化を進める等、内部管理体制の一層の充実に努め、業務効率の向上を図ってまいります。

## 4 【事業等のリスク】

以下において、当社グループの事業上のリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしも事業上のリスクに該当しない事項についても、投資家の投資判断上、重要であると考えられる事項については、投資家に対する情報開示の観点から積極的に開示しております。当社グループは、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避、発生した場合の対応に努める方針であります。当社グループの経営状況及び将来の事業についての判断は、本項目および本書の本項目以外の記載内容も併せて、慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。

なお、文中における将来に関する事項は、当社グループが当連結会計年度末現在において入手している情報に基づき、その時点において判断したものであります。また、以下の記載は当社グループの事業リスクを全て網羅するものではないことをご留意ください。

### (1) 事業セグメント別の状況について

#### ① 乗換案内事業

連結財務諸表の作成を開始した平成13年9月期以来、連結売上高に占める当該事業セグメントの売上高の割合は増加を続けており、当連結会計年度においては91.1%になっております。従って、当社グループの業績についても、当該事業セグメントへの依存度が高くなっており、当該事業セグメントの業績動向によっては、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

#### ② マルチメディア事業

平成13年9月期以来、家庭用ゲームソフトウェアの売上高が減少し、当該事業セグメントの売上高の連結売上高に占める割合が減少するとともに、営業損失の発生が続いております。今後は、家庭用ゲームソフトウェアの開発・販売は行わず、携帯電話向けコンテンツの事業に特化しつつ、ゲーム以外のコンテンツにも範囲を拡大していくことで、事業の再編及び黒字化を図る方針です。

が、当社グループの目論見通りに業績が推移するとは限りません。

また、ゲーム等のキャラクターに関して、外部から著作物の商品化権の許諾を受けて製品・サービスを提供しておりますが、取引条件を含め、商品化権の許諾元との関係に変化があった場合、当該事業セグメントの業績に影響を及ぼす可能性があります。

### ③ その他

当該事業セグメントにおいては、売上の大半が特定の会社グループに対するものであり、何らかの理由によりそれが減少した場合、当該事業セグメントの業績に影響を及ぼす可能性があります。なお、当該事業セグメントの売上高の連結売上高に占める割合は減少傾向にあるため、当社グループ全体の財政状態及び経営成績に対する影響は減少傾向にあります。

## (2) 業界動向について

### ① パソコン(ハードウェア)

パソコンの国内出荷台数は、平成15年度には1,078万台、前年同期比9.6%増（(社)電子情報技術産業協会『わが国におけるパーソナルコンピュータの平成15年度出荷実績』）とここ数年の減少傾向から増加に転じております。しかしながら、パソコン出荷台数の増加が続く保証はなく、パソコン等のコンピュータの出荷台数の動向によっては、当社グループの経営成績に影響を与える可能性があります。

### ② 携帯電話・パソコン等からのインターネット利用

携帯電話・パソコン等からのインターネットの日本における利用者数は、これまで増加基調で推移しています。また、通信速度の向上や通信量の増大も進んでおり、同時に利用者にとっての利便性も向上してきております。これらの利用者数の増加や利用状況の向上が、当社グループがインターネット関連事業を拡大するに当たっての前提となります。しかしながら、携帯電話・パソコン等からのインターネットの日本における利用者数が徐々に飽和に近づく等により、その増加率が当社グループの想定を下回った場合には、当社グループの事業展開や経営成績に影響を与える可能性があります。

## (3) 競合状況について

### ① 経路検索ソフトウェア・サービス

経路検索のソフトウェア・サービスの市場においては、現在は数社が競合先として挙げられます。その中でも、株式会社ヴァル研究所の「駅すばあと」が先行して経路検索ソフトウェアの発売を開始しており、パソコン向け製品及びインターネットサービスにおいて、現在も有力な競合先となっております。また、携帯電話向けサービスについては、株式会社駅前探険倶楽部の「駅前探険倶楽部」が有力な競合サービスであると考えております。これら競合先の動向や新規参入企業の出現等によっては、当社グループの経営成績に影響を与える可能性があります。

### ② 携帯電話向けのコンテンツ提供

携帯電話向けのコンテンツ提供については、当該市場は拡大しているものの、大きな参入障壁がないこと等により新規参入企業の増加や既存企業の事業拡大等が続いております。従って、当社グループが携帯電話向け「乗換案内」サービスやその他携帯電話向けコンテンツの事業を推進

するに当たり、厳しい競争環境にさらされることとなり、当社グループの事業展開及び経営成績に影響を与える可能性があります。

### ③ 携帯電話・パソコン向けインターネットでの旅行販売

インターネットでの旅行の販売については、急速なIT化及び異業種をも巻き込んだ業界再編成等が展開されております。当該事業には、専門の宿泊予約サイトの他、ポータルサイト、通販サイト、旅行代理店、鉄道会社、航空会社等が参入しており、それぞれ競合しつつも場合により提携するという関係になっております。当社グループとしては、携帯電話やパソコン向けインターネットの「乗換案内」サービスを基盤とし、それらとの連携により差別化を図りつつ旅行販売を展開していく方針ですが、当社グループの事業展開に応じて競合領域が拡大することも予想され、その状況によっては、当社グループの事業展開及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### (4) 業績の季節変動性について

「乗換案内」のパソコン向け及び法人向けの製品については、通常年に4回程度、バージョンアップした製品を提供しており、それら製品の発売に伴い売上高が増加する傾向にあります。そのため、四半期の財政状態及び経営成績の変動に影響を及ぼす可能性があります。なお、「乗換案内NEXT」のような携帯電話向けの有料サービス等の売上高が増加するに伴い、業績の季節変動性は緩和される傾向にあります。

### (5) 特定の製品・サービスへの依存について

「(1) 事業セグメント別の状況について」にも記載の通り、当社グループ全体の売上高及び営業利益に占める乗換案内事業の割合は大きく、当社グループ全体の業績は「乗換案内」製品・サービスの動向に大きく依存しております。

「乗換案内」のパソコン向け製品については、当社グループは数社のパソコンメーカーに対してプレインストール版の提供を行っており、バージョンアップした製品の販売につなげる等の販売促進の機能を担っております。そのため、プレインストール版の出荷本数の動向によっては、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

また、携帯電話やパソコン向けインターネットの「乗換案内」サービスについても、無料サービスのアクセス数を基盤として、有料サービスへの誘導や付随サービスの提供等を行っており、今後もその延長線上に事業拡大を図る方針です。従って、携帯電話やパソコン向けインターネットの「乗換案内」サービスへの依存度も今後とも高水準で推移していくものと予想され、そのアクセス数や利用者数の動向によっては、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

### (6) 特定の取引先への依存及び経営上の重要な契約について

#### ① 時刻表データの利用

当社は乗換案内事業における時刻表データに関して、「5 経営上の重要な契約等」に記載のとおり、株式会社交通新聞社及び株式会社ジェイティービーと時刻表データの利用に関する契約を締結しており、それら契約に基づいて、当社は時刻表データをダイヤ改正前にデジタルデータで



収受しております。そのため、当社は「乗換案内」のアップデートを迅速に行う体制を整えることができしております。従って、当該契約が何らかの理由により終了した場合または契約内容の変更があった場合、あるいは上記2社の方針変更等により時刻表データの状況に変更があった場合には、「乗換案内」のアップデートが遅れ、その価値が低下する可能性があり、その結果、当社グループの経営成績に影響を与える可能性があります。

## ② 携帯電話向けの情報提供

当社は、携帯電話向けの情報提供に関して、「5 経営上の重要な契約等」に記載のとおり株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ、KDD I株式会社、ボーダフォン株式会社とそれぞれ情報提供及び情報料の回収に関する契約を締結しており、それら契約に基づいて携帯電話向けに情報を提供しております。連結売上高に占める携帯電話向け情報提供に関連する売上高の割合は増加しており、今後もその傾向は継続するものと見込んでおります。従って、当該契約が何らかの理由により終了した場合または契約内容の変更があった場合、あるいは上記3社の方針変更や業界動向等により携帯電話向けの情報提供の状況に変更があった場合には、当社グループの経営戦略及び経営成績に影響を与える可能性があります。

## (7) 社内体制について

### ① 内部管理体制

当社グループは、平成16年9月30日現在、役員10名および従業員47名と小規模な組織であり、内部管理体制もその規模に応じた体制を整えております。

今後につきましては、当社グループは各種施策の実施により内部管理体制の充実に努めてまいります。しかしながら、当社グループが適切かつ十分な組織的対応を行ったにもかかわらず、組織的業務効率が低下する可能性があります。

### ② 技術者への依存

当社グループは、少数精鋭で効率的な製品開発を実施しております。徐々に体制を強化し、複数のメンバーで開発技術が共有できるよう試みておりますが、現段階ではまだ十分とは言えません。そのため、主要な技術者の病気、死亡、退職等により、当社グループの経営成績に影響を受ける可能性があります。

また、当社グループは、新しい技術への対応が常に要求される事業を営んでおります。その中で、競争力を確保するためには、優秀な技術者とそれによって構成された開発体制が必要であると認識しております。今後の当社グループの成長のため、現在当社グループに在籍している技術者と同等もしくはそれ以上の人材の発掘及び育成が必要になります。的確な人材を適切な時期にかつ十分に確保できなかった場合、当社グループの将来における事業展開が制約を受ける可能性があります。

### ③ 特定人物への依存及びその影響力

当社の代表取締役社長であり発行済株式数の50.00%を所有（平成16年9月30日現在）する佐藤俊和は、当社グループの経営戦略の決定及び事業執行、株主総会での承認を必要とする全ての事項に多大な影響力を持っております。また、「第5 経理の状況」の中の「関連当事者との取引」に記載の通り、当社の旅行会社からの商品仕入債務に対し債務保証を受けております。

当社グループは、今後、社内体制の整備による企業統治の強化や各事業担当者への権限委譲等

を進めており、また、信用力の強化に努めておりますが、現状では佐藤への依存度は大きく、何らかの理由で佐藤が職務を遂行できなくなった場合、当社グループの経営方針及び業績に影響を与える可能性があります。

(8) システム障害について

外部からの不正な手段による当社グループのシステム内への侵入等の犯罪や、役職員の過誤等によって、当社グループのシステム内の重要なデータが消去される、あるいは、外部に流出する恐れがあります。また、アクセス増加等の一時的な過負荷、当社グループのシステムの欠陥、あるいはコンピュータウイルスへの感染等によって、当社グループのシステムに障害が発生し、サービスの停止等につながる可能性があります。これらのリスクを低減するため、経常的にサーバー設備投資等のシステム投資を行っていく方針ですが、万一これらの問題が発生した際には、直接的な損害が生じる他、当社グループのシステム自体への信頼性の低下を招きかねず、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 製品・サービスの品質について

① 誤作動・バグ（瑕疵）

当社グループが提供する製品・サービスに誤作動・バグ（瑕疵）等が生じた場合、損害賠償責任が発生する可能性があります。当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。さらに、そのような場合には、当社グループはユーザーからの信頼を喪失し、当社グループの事業展開及び経営成績に影響を与える可能性があります。

② 陳腐化

情報通信業界は、技術革新、業界標準及び顧客ニーズの変化、新技術及び新サービスの登場等が激しく、その中で事業を展開している当社グループにおいても、的確かつ効率的な研究開発を経常的に行い、技術革新に対応するよう努めております。しかしながら、当社グループにおける技術革新への対応が順調に進まない場合、当社グループの提供する製品・サービスが陳腐化することで競争力が弱体化し、当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 知的財産権について

当社グループは、現時点において第三者より知的所有権に関する侵害訴訟等を提起されることや、そのような通知は受けておりません。当社では、他社の特許状況について情報収集に努め、必要に応じて弁理士へ調査を依頼する体制を整えております。しかしながら、将来、当社グループの事業活動に関連して第三者が知的所有権の侵害を主張する可能性があります。また、当社グループの属する市場が大きくなり、事業活動が複雑多様化するにつれ、知的所有権をめぐる紛争が発生する可能性は大きくなるものと考えられます。

(11) 法的規制について

現状において、当社グループの事業展開上の障害となるような法的規制はありませんが、当社グループの事業を取り巻く規制の状況によっては事業活動が狭まることが予想されます。特に、インターネットの利用等に関しては、現行法令の適用や新法令の制定、あるいは事業者間における自主

規制等が行われることも予想され、当社グループの事業が制約される可能性があります。

また、当社グループは今後、旅行取扱等の事業拡大を図っていく方針です。当該分野に関しては、当社は旅行業法に基づき第一種旅行業登録を行っております。今後、同法及び関係法令の改訂等によって、新たな規制が導入されて事業が制約される可能性、あるいは規制が緩和されて競合が激化する可能性があります。

それらの結果、当社グループの事業戦略や経営成績に影響を与える可能性があります。

#### (12) 個人情報の取扱について

当社グループでは、「乗換案内」製品・サービスの顧客の登録情報や購入履歴、旅行事業の顧客情報等の各種個人情報を保有しております。これらの個人情報については、外部からの不正アクセスに対する技術的な対応、情報へのアクセス制限、個人情報取扱に関する社員教育等を進め、流出の防止に努めております。しかしながら、個人情報が万一流出した場合、損害賠償請求や行政官庁等による制裁、刑事罰等を受ける、あるいは社会的信用を失う等の可能性があり、その結果、当社グループの経営成績に影響を与える可能性があります。

#### (13) 会計基準の変更について

当社グループは、各種会計基準の変更に対して適宜対応を行っております。しかしながら、将来において会計基準の大きな変更があった場合には、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

#### (14) 投融資について

当社グループは、平成16年9月30日現在、主に事業上の提携を目的として合計4社に投資をしております。当該保有有価証券については、必要に応じて評価損を計上する等の措置を採っておりますが、投資先の今後の業績によっては、当社グループの将来の財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

また、当社グループは、携帯電話向け「乗換案内」を基盤として事業展開を図っていく方針ですが、その中で事業展開のスピードアップや収益源の多様化等を目的として、第三者企業への資本参加、子会社設立、合弁事業への参加、企業買収、設備投資等を行っていくことも考えられます。その際、それに伴うリスク等を慎重に検討した上で投融資を実行していく方針ですが、これらの投融資の結果を確実に予測することは困難であり、投融資の回収が滞る等により、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性があります。

#### (15) 訴訟について

当社グループは現時点において、当社グループの事業に関連した訴訟を提起されることや、そのような通知は受けておりませんが、事業の性格上、あるいは今後の事業展開により、訴訟を受ける可能性があります。特に、インターネットを通じた事業を行っているため、不特定多数のユーザー等から訴訟を提起される可能性があります。

訴訟の内容及び金額によっては、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を与える可能性が

あります。

(16) 今後の事業展開について

当社グループは今後、携帯電話やパソコン向けインターネットの「乗換案内」サービスを基盤として、その延長線上の事業拡大を図っていく方針です。中でも、旅行関連の事業を重点的に拡大していく方針ですが、既に記載した通り、競合状況の激化や携帯電話・パソコン向けインターネットの「乗換案内」サービスの競争力低下、法的規制に伴う制約、個人情報流出等の事態により、当社グループの目論見通りに推移するとは限りません。また、当初は初期投資及び追加発生する費用が過大になることも考えられます。その結果、当社グループの事業展開や財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループにおいては、将来の成長のため、新規事業への参入を図ることも考えられます。その実行に当たっては、十分な検討を行う方針ですが、市場環境や顧客ニーズの変化等不測の事態により当初計画を達成できず、投資及び費用負担に見合う収益が得られない可能性があります。また、計画通りに推移する場合でも、立ち上げ期においては投資及び費用負担が過大になることも考えられます。それらの結果として、当社グループの財政状態及び経営成績に影響を及ぼす可能性があります。

## 5 【経営上の重要な契約等】

### (1) 時刻表データに関する契約

契約会社名	契約先名・契約名	契約内容	契約日	契約期間
ジョルダン株式会社	株式会社交通新聞社 「時刻情報使用許諾契約」	JR各社から提供を受けた時刻表に関するデジタル・データを提供して、非独占的な複製利用を許諾する契約。	平成16年6月1日	平成16年6月1日から平成17年5月31日までの1年間。期間満了の3箇月前までに、書面により更新しない旨の申し出がないときは、次の1年間自動的に更新し、以降も同様。
ジョルダン株式会社	株式会社ジェイティービー 「私鉄等時刻情報提供に関する基本契約」	私鉄等各社から提供を受けた列車運行等に関する情報を提供して、非独占的な複製利用を許諾する契約。	平成15年5月1日	平成15年5月1日から平成16年4月30日まで。期間満了の1箇月前までに、双方書面により更新しない旨合意したときを除き、次の1年間自動的に更新し、以後も同様。

(2) 携帯電話向けの情報提供に関する契約

契約会社名	契約先名・契約名	契約内容	契約日	契約期間
ジョルダン株式会社	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ 「iモード情報サービス提供者契約」	iモードを利用した情報の配信に関する契約。	平成12年10月31日	平成12年11月6日から平成13年3月31日まで。期間満了の1ヶ月前までにいずれからの特段の申出がない限り、1年間自動継続し、以後も同様。
ジョルダン株式会社	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ 「iモード情報サービスに関する料金収納代行契約」	有料配信するコンテンツの情報料をそのコンテンツの利用者等に請求し、収納を代行する契約。	平成15年3月13日	平成15年3月17日から平成16年3月31日まで。期間満了の1ヶ月前までにいずれからの特段の申出がない限り、1年間自動継続し、以後も同様。
ジョルダン株式会社	KDDI株式会社 「EZインターネット情報提供契約」	EZインターネットを利用した情報の提供サービスに関する契約。	平成12年7月1日	平成12年7月1日から平成13年6月30日まで。期間満了の3ヶ月前までに、いずれから書面による何らの意思表示もないときは、1年間自動的に延長、以後も同様。
ジョルダン株式会社	KDDI株式会社等 「情報料回収代行サービスに関する契約」	EZwebを利用して提供される情報サービスの情報料について、利用者からの回収を代行して行う契約。	平成14年9月20日	平成14年10月1日から平成15年9月30日まで。期間満了の90日前までに書面による特段の意思表示がない場合は、6ヶ月間更新し、以後も同様。
ジョルダン株式会社	ボーダフォン株式会社 「コンテンツ提供に関する基本契約」	ボーダフォン株式会社等の情報提供サービスを通じた文字情報等の提供に関する契約。	平成11年12月8日	平成11年12月8日から平成12年3月31日まで。期間満了日の3ヶ月前までに終了させる旨の書面による意思表示がない場合はなお1年間有効とし、以後も同様。
ジョルダン株式会社	ボーダフォン株式会社 「債権譲渡契約」	コンテンツの提供に関する料金債権を一括して譲渡する契約。	平成15年9月12日	上記「コンテンツ提供に関する基本契約」に準ずる。

## 6 【研究開発活動】

当社グループは、技術革新、業界標準及び顧客ニーズの変化、新技術及び新サービスの登場等が激しい情報通信業界において事業を展開しております。その中で、新しい技術への対応を行い、競争力を確保するため、的確かつ効率的な研究開発活動を経常的に行うよう努めております。

当連結会計年度の研究開発活動は主に、技術部、開発部及びマルチメディア部にて行ってまいりました。さらに、シナジー効果の活用を図るため、必要に応じプロジェクトチームを編成し、研究開発活動を行ってまいりました。

その結果、一般管理費および当期総製造費用に含まれる研究開発費の総額は、48,601千円となりました。

事業の種類別セグメントの研究開発活動を示すと、次のとおりであります。

### 乗換案内事業

大きく分けて、「乗換案内」の各プラットフォーム向け製品・サービスと、インターネットでの付随サービスについて、研究開発を行ってまいりました。

「乗換案内」の各プラットフォーム向け製品・サービスについては、パソコン向け「乗換案内」の新製品、パソコン向けインターネットの「乗換案内」の新サービス、インターネットテレビ向け「乗換案内」サービス等の研究開発を行ってまいりました。

インターネットでの付随サービスについては、携帯電話・パソコン向けインターネットでの旅行予約・販売、E Z w e b 向け「乗換案内」に関する付随サービス等に関する研究開発を行ってまいりました。これらについては、サービスの提供開始に至っております。

上記の研究開発活動等の結果、乗換案内事業における研究開発費は27,720千円となりました。

### マルチメディア事業

大きく分けて、家庭用ゲームソフトと携帯電話向けコンテンツの研究開発を行ってまいりました。

家庭用ゲームソフトについては、ゲームボーイアドバンス向けに1タイトルを開発し、発売いたしました。

携帯電話向けコンテンツについては、キャラクターコンテンツ及びブックビューア等の研究開発を行ってまいりました。キャラクターコンテンツにつきましては、サービスの提供を開始いたしております。また、a u の B R E W を利用したブックビューアにつきましても、展示会への出展を行うに至っております。

上記の研究開発活動等の結果、マルチメディア事業における研究開発費は20,881千円となりました。

### その他

特記すべき研究開発活動はありません。

## 7 【財政状態及び経営成績の分析】

本項に記載した内容には、将来の予測、見込、見通し、方針等に関する記述を含んでおり、それらは当連結会計年度末において判断したものであります。将来に関する事項には、リスク、不確実性、仮定等が伴っており、実際の結果とは大幅に異なる可能性があります。なお、このような可能性の要因として想定し得る主要なものについては「5 事業等のリスク」に記載しておりますが、それらに限定されるものではありません。

当社グループの財政状態及び経営成績に関する以下の分析は、本有価証券報告書の他の箇所に記載された情報とあわせてお読みください。

### (1) 経営成績についての分析

#### ① 概況

当連結会計年度（平成15年10月1日～平成16年9月30日）におけるわが国経済は、設備投資や輸出が増加し、企業収益の改善が進み、雇用情勢の改善により個人消費が緩やかに増加する等、景気が着実に回復してまいりました。

情報通信業界におきましても、設備投資や個人消費の増加等の影響もあり、パソコン出荷台数が前連結会計年度（平成14年10月1日～平成15年9月30日）を上回り、また、企業のソフトウェア投資が緩やかながらも増加している等、今後のソフトウェア・情報サービス需要には期待の持てる状況になってきております。また、ブロードバンド環境の普及等、ユビキタス・ネットワーク化が着実に進展しております。特に携帯電話につきましては、平成16年9月末にはインターネット接続の契約数が72百万件を超える等、インターネット端末として広く浸透しております。

当社グループにおきましても、携帯電話で3キャリア向けに提供いたしております無料版「乗換案内」の検索回数は平成16年7月には月間57百万回を超える等、インターネットでの更なる事業展開の基盤を確立してまいりました。

このような環境の中で、当連結会計年度における当社グループの売上高は1,448,571千円（前年同期比25.2%増）、営業利益は300,479千円（前年同期比63.2%増）、経常利益は300,598千円（前年同期比86.2%増）、当期純利益は148,805千円（前年同期比75.5%増）という経営成績となりました。

なお、会計処理の変更により、当連結会計年度から、「乗換案内時刻表対応版」の店頭販売パッケージにつき、返品調整引当金を計上する方法に変更した結果、従来の方法によった場合に比べ、営業利益及び経常利益がそれぞれ4,839千円増加し、税金等調整前当期純利益が16,685千円減少しております。

#### ② 売上高

売上高は1,448,571千円（前年同期と比べ291,998千円、25.2%増）となりました。

これは、事業の種類別セグメントの売上高について、乗換案内事業が1,319,843千円（前年同期と比べ406,384千円増）と大幅に増加し、マルチメディア事業が86,117千円（前年同期と比べ99,827千円減）、その他が42,610千円（前年同期と比べ14,558千円減）と減少した影響を上回ったためであります。中でも売上高増加の主要因は、携帯電話向けの有料サービス「乗換案内NEXT」の会員数が増加したために会員に対する月額の情報料売上が増加したこと、パソコン向けインターネット版「乗換案内」及び携帯電話向け「乗換案内NEXT」の利用者等に対する旅行商品



の販売を開始したこと等により旅行の売上が増加したことであります。

### ③ 売上原価等

売上原価等（返品調整引当金戻入額及び返品調整引当金繰入額の差引を含む。）は721,521千円（前年同期と比べ98,778千円、15.9%増）となりました。

金額が増加している主要因は、旅行の売上が増加したことに伴い、旅行商品の仕入が増加したことであります。

しかしながら、売上高に占める割合は49.8%となり、前年同期と比べ4.1ポイント減少しております。これは売上高が増加する一方、当社の当期製品製造原価が482,253千円（前年同期と比べ33,543千円減）となったこと等によるものであります。当社の当期製品製造原価が減少した要因は、労務費が151,583千円（前年同期と比べ31,343千円減）、経費が293,627千円（前年同期と比べ22,126千円減）となったことであります。また、事業の種類別セグメント情報の観点からすると、原価率の低い乗換案内事業の売上高が増加し、原価率の高いマルチメディア事業の売上高が減少したためであります。

なお、会計処理の変更により返品調整引当金戻入額及び返品調整引当金繰入額を計上することとなったため、売上原価等に差引でマイナス4,839千円の影響を与えております。

以上の結果、差引売上総利益は727,050千円（前年同期と比べ193,219千円、36.2%増）となりました。

### ④ 販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費は426,570千円（前年同期と比べ76,827千円、22.0%増）となりました。

各費目別に見ても、事業規模の拡大に伴い全体的に金額が増加しております。また、携帯電話向け有料サービスの売上高が増加したことにより、その回収代行手数料が増加した影響で、支払手数料が57,252千円（前年同期と比べ41,550千円増）と大幅に増加しております。

一方で、売上高に占める割合は29.5%となり、前年同期と比べ0.7ポイント減少しております。これは、売上高が増加する一方、広告宣伝費が69,450千円（前年同期と比べ2,658千円減）となり、また、事業の種類別セグメント情報における全社費用が134,747千円（前年同期と比べ9,013千円減）となったこと等によるものであります。

以上の結果、営業利益は300,479千円（前年同期と比べ116,392千円、63.2%増）となりました。

### ⑤ 営業外損益

営業外収益については、受取配当金の計上により369千円（前年同期と比べ271千円増）となりました。

営業外費用は251千円（前年同期と比べ22,477千円減）となりました。これは、前年同期には当社株式の新規公開に伴い、株式公開費21,042千円を計上していたこと等によるものであります。

以上の結果、経常利益は300,598千円（前年同期と比べ139,142千円、86.2%増）となりました。

### ⑥ 特別損益

特別利益については、役員・主要株主株式売買利益金の計上により7,549千円（前年同期はゼロ）となりました。

特別損失は26,950千円（前年同期と比べ26,173千円増）となりました。これは主に、会計処理の変更による過年度返品調整引当金繰入額21,524千円に加え、工具器具備品及びソフトウェアを

除却し、固定資産除却損として4,424千円を計上したことによるものであります。

以上の結果、税金等調整前当期純利益は281,196千円（前年同期と比べ120,518千円、75.0%増）となりました。

#### ⑦ 法人税等及び法人税等調整額

法人税等及び法人税等調整額は合わせて132,390千円（前年同期と比べ56,497千円増）となりました。税法の改正による税率の引き下げ等により、税効果会計適用後の法人税等の負担率は、47.08%（前年同期は47.23%）に低下しております。

以上の結果、当期純利益は148,805千円（前年同期と比べ64,020千円、75.5%増）となりました。

### (2) 資本の財源及び資金の流動性に係る情報

#### ① キャッシュ・フローに係る分析

当連結会計年度末における連結ベースの現金および現金同等物は、前連結会計年度末と比べ97,526千円増の891,141千円となりました。

営業活動によるキャッシュ・フローは177,791千円の収入（前年同期は32,038千円の支出）となりました。前年同期と比べ大きく変動している主要因は、税金等調整前当期純利益が120,518千円増の281,196千円となったこと及び法人税等の支払額が62,002千円減の100,712千円となったことであります。

投資活動によるキャッシュ・フローは56,547千円の支出（前年同期比8.6%増）となりました。有形固定資産の取得による支出及び無形固定資産の取得による支出がともに減少したものの、投資有価証券の取得による支出17,500千円があったこと等により、全体としては前年同期とほぼ同程度となりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは23,708千円の支出（前年同期は175,258千円の収入）となりました。前年同期と比べ大きく変動している要因は、前年同期には株式発行による収入204,280千円がありましたが、当連結会計年度には資金調達を特に実施していないことであります。

#### ② 資金需要の内容及び資金調達の方針

現状における当社グループの資金需要は、運転資金が主たるものであり、その内容は製造費、商品仕入、販売費及び一般管理費等の営業費用であります。製造費の内訳は、人件費、時刻表データ等の情報使用料、外注費、材料費等であります。商品仕入については、主に旅行商品の仕入であります。販売費及び一般管理費の内訳は、人件費、広告宣伝費、支払手数料等であります。

資金調達については、内部留保資金により調達しております。今後、大きな資金需要が発生した場合には、借入または増資等による資金調達の可能性もありますが、当面必要な運転資金及び設備投資資金については、内部留保資金及び営業活動によるキャッシュ・フローにより十分調達可能であると考えております。